

4 特集

温泉街 東伊豆町における 大学生による地域活性化の試み

東伊豆町の抱える問題

本稿では、温泉街である静岡県東伊豆町が、どのように大学生をまちづくりに取り込み、若者を軸とした観光を目指してきたかを、筆者が所属する跡見学園女子大学の例を挙げて述べていきたい。

令和元（2019）年11月19日に本学が静岡県東伊豆町と地域連携協定を締結して以来、筆者のゼミでは東伊豆町の地域活性化事業に携わってきた。東伊豆町は大川温泉、北川温泉、熱川温泉、片瀬温泉、白田温泉、稲取温泉という6つの温泉郷をもち、全国でも有数の宿泊施設がある観光が基幹産業となっている地域である。

しかしながら、観光形態が昭和の団体旅行から個人旅行に変化し、交通も東京など主要な都市から2〜3時間ほどかかることに加え、町では少子高齢化に伴う人口減少も進み、平成初期のピーク時には200万人近くいた宿泊客数が、平成20（2008）年ごろには半数の100万人ほどに減少し、それ以降もなかなか回復しないという問題を抱えていた。そこで、大学生という若者、かつ女性の視点から、東伊豆町の魅力を再発見し、観光の在り方を見直していく試みが筆者のゼミで始まった。

跡見学園女子大学 観光コミュニケーション学部 観光デザイン学科 塩月 亮子

次に、これまで特に力を入れたこととして、サッポロビール株式会社との産官学連携事業に関して詳しく述べる。

産官学連携事業によるカクテル開発

筆者のゼミでは、令和3（2021）年から「東伊豆町×サッポロビール×跡見学園女子大学」として、地産地消およびSDGsにも繋がるカクテルレシピ（サワー）の開発を行ってきた。カクテルに用いた伊豆特産品「いずのはる」というミカンが傷がつきやすく長持ちしないため、廃棄されたり生産を敬遠されたりすることが多かった。そこで、ゼミ生たちはこのミカンに注目し、新たなカクテルを作ることにした。協力してくださった地元の宿泊施設では、注文を受けるとその場



写真1 学生による「いずのはるサワー」ミカンのPOP



写真3 学生による「いずのはるサワー」罐のつるし飾りのPOP



写真2 学生による「いずのはるサワー」東伊豆町の景色のPOP

で「いずのはる」を絞り、その果汁をウオツカやトニックで割って顧客に提供した。また、当カクテルのPOPもゼミ生たちが制作してきた。最新のPOPは、ゼミ生たちが実地調査で撮影した東伊豆町の写真を背景とし、そこにQRコードを付け、カクテルの提供者や注文者へのアンケートができ、英語に限らず中国語や韓国語など多言語による力





写真5 玉川高島屋S.C.での試飲会で作られた「いずのはるサワー」



写真4 玉川高島屋S.C.での「試飲会(学生によるサワーづくりの様子)」

クテルの説明が読めるものとした(写真1・2・3参照)。そして、令和7(2025)年の春には、東京の玉川高島屋S.C.で関係者による試飲会も実施された。

なお、若者をターゲットにした場合はノンアルコールのカクテル開発が必要だという声もゼミ生たちから出ており、現在検討中である。

熱川温泉での台湾の九份を模したイベント

ここで、東伊豆町にある温泉街のひとつ、熱川温泉が実施しているイベントについて簡単に触れたい。熱川では「熱川に、九份が灯る。」まちづくり協議会」が中心となり、「熱川台湾提灯プロジェクト」を立ち上げ、令和6(2024)年4月から「熱川ゆけむり夜市」と称する月1回の夜のイベントを開催している。発案者は町長の岩井茂樹氏



写真7 熱川温泉での「熱川ゆけむり夜市」の屋台



写真6 熱川温泉での「熱川ゆけむり夜市」を楽しむ人々

行うならば、熱川温泉は夜市を行うという意味合いもあり、開始から今まで、旅館やホテルに宿泊する観光客や地元の人々が大勢訪れているという。若者を意識し、写真映えのする撮影スポットが数カ所用意され、台湾料理をはじめ、地元特産品を調理して出す屋台もあり、日本人のみならず、海外からの観光客にも人気があるとのことである。

跡見学園女子大学による東伊豆町地域活性化のこれから

以上、跡見学園女子大学での東伊豆町地域活性化の取り組みのうち、主にサッポロビール株式会社との産官学連携事業活動について述べてきた。学生たちは新しいカクテル(サワー)のPOPづくりやSNSでの宣伝などを担当してきたが、そこには若者ならではのおしゃれな感性が見て取れる。実際に地元を訪れ、地元の観光資源をじっくりと観察し、地元の人々とのface to faceの関係を持ったからこそ、学生たちは東伊豆町に愛着を感じ、真剣にその活性化に取り組むことができた。若い頃からその地のファンとなることは、その後もそこを何度も訪れる交流人口となる可能性が高い。今後は東伊豆町に国内の若者を呼ぶことのみならず、熱川温泉にみられる九份を模した取り組みのように、インバウンドへのアプローチも積極的に行っていくことを、学生たちと考えていきたい。

(注 写真はすべて筆者による撮影)